

海潮音

上田敏

上田敏訳

青空文庫

遙に此書を滿州なる森鷗外氏に獻ず

大寺の
香の煙
はほそ

獅子舞歌

くとも、
空にの
ぼりて
あまぐ
もとな
る、あ
まぐも
となる

海潮音序

卷中收むる所の詩五十七章、詩家二十九人、伊太利亞に三人、英吉利に四人、獨逸に七人、プロワンスに一人、而して佛蘭西には十四人の多きに達し、曩の高踏派と今の象徴派とに屬する者其大部を占む。

高踏派の莊麗體を譯すに當りて、多く所謂七五調を基としたる詩形を用ゐ、象徴派の幽婉體を翻するに多少の變格を敢てしたるは、其各の原調に適合せしめむが爲なり。

詩に象徴を用ゐること、必らずしも近代の創意に非らず、これ

或は山嶽と共に舊るきものならむ。然れども之を作詩の中心とし本義として故らに標榜する所あるは、蓋し二十年來の佛蘭西新詩を以て嚆矢とす。近代の佛詩は高踏派の名篇に於て發展の極に達し、彫心鏤骨の技巧實に燦爛の美を恣にす、今茲に一轉機を生ぜずむばあらざるなり。マラルメ、エルレエヌの名家之に觀る所ありて、清新の機運を促成し、終に象徴を唱へ、自由詩形を説けり。譯者は今の日本詩壇に對て、専ら之に則れと云ふ者にあらず、素性の然らしむる所か、譯者の同情は寧ろ高踏派の上に在り、はたまたダンヌンチオ、オオバネルの詩に注げり。然れども又徒らに晦澁と奇怪とを以て象徴派を攻むる者に同ぜず。幽婉奇聳の新聲、今人胸奥の絃に觸るゝにあらずや。坦々たる古道の盡くるあたり、

荊棘路を塞ぎたる原野に對て、之が開拓を勤むる勇猛の徒を貶す者は怯に非らずむば愴なり。

譯者嘗て十年の昔、白耳義文學を紹介し、稍後れて、佛蘭西詩壇の新聲、特にエルレエヌ、エルハアレン、ロオデンバツハ、マラルメの事を説きし時、如上文人の作なほ未だ西歐の評壇に於ても今日の聲譽を博する事能はざりしが、爾來世運の轉移と共に清新の詩文を解する者、漸く數を増し勢を加へ、マアテルリンクの如きは、全歐思想界の一方に覇を稱するに至れり。人心觀想の默移實に驚くべき哉。近體新聲の耳目に嫻はざるを以て、倉皇視聽を掩はむとする人々よ、詩天の星の宿は徙りぬ、心せよ。

日本詩壇に於ける象徴詩の傳來、日なほ淺く、作未だ多からざ

るに當て、既に早く評壇の一隅に囁々の語を爲す者ありと聞く。象徴派の詩人を目して徒らに神経の鋭きに傲る者なりと非議する評家よ、卿等の神経こそ寧ろ過敏の徴候を呈したらずや。未だ新聲の美を味ひ功を收めざるに先ちて、早く其弊竇に戰慄するものは誰ぞ。

歐洲の評壇亦今に保守の論を唱ふる者無きにあらず。佛蘭西のブリュンチエル等の如きこれなり。譯者は藝術に對する態度と趣味とに於て、此偏想家と頗る説を異にしたれば、其云ふ所に一々首肯する能はざれど、佛蘭西詩壇一部の極端派を制馭する消極の評論としては、稍耳を傾く可きもの無しとせざるなり。而してヤスナヤ・ポリヤナの老伯が近代文明呪詛の聲として、其一端をか

の「藝術論」に露はしたるに至りては、全く贊同の意を呈する能はざるなり。トルストイ伯の人格は譯者の欽仰措かざる者なりと雖、其人生觀に就ては、根本に於て既に譯者と見を異にす。抑も伯が藝術論はかの世界觀の一片に過ぎず。近代新聲の評隲に就て、非常なる見解の相違ある素より怪む可きにあらず。日本の評家等が僅に「藝術論」の一部を抽讀して、象徴派の貶斥に一大聲援を得たる如き心地あるは、毫も清新體の詩人に打撃を與ふる能はざるのみか、却て老伯の議論を誤解したる者なりと謂ふ可し。人生觀の根本問題に於て、伯と説を異にしながら、其論理上必須の結果たる藝術觀のみに就て贊意を表さむと試むるも難い哉。

象徴の用は、之が助を藉りて詩人の觀想に類似したる一の心状

を讀者に與ふるに在りて、必らずしも同一の概念を傳へむと勉むるに非ず。されば靜に象徴詩を味ふ者は、自己の感興に應じて、詩人も未だ説き及ぼさざる言語道斷の妙趣を翫賞し得可し。故に一篇の詩に對する解釋は人各或は見を異にすべく、要は只類似の心状を喚起するに在りとす。例へば本書九〇頁「鷺の歌」を誦するに當て讀者は種々の解釋を試むべき自由を有す。此詩を廣く人生に擬して解せむか、曰く、凡俗の大衆は眼低し。法利賽パリサイの徒と共に虚偽の生を營みて、醜辱汚穢の沼に網うつ、名や財や、はた樂欲を漁らむとすなり。唯、縹緲たる理想の白鷺は羽風徐に羽撃きて、久方の天に飛び、影は落ちて、骨蓬の白く清らにも漂ふ水の面に映りぬ。之を捉へむとしてえせず、此世のものならざれば

なりと。されどこれ只一の解釋たるに過ぎず、或は意を狭くして詩に一身の運を寄するも可ならむ。肉體の欲に饜きて、とこしへに精神の愛に飢ゑたる放縱生活の悲愁こゝに湛へられ、或は空想の泡沫に歸するを哀みて、眞理の捉へ難きに憧がるゝ哲人の愁思もほのめかさる。而して此詩の喚起する心状に至りては皆相似たり。一〇七頁「花冠」は詩人が黄昏の途上に佇みて、「活動」、「樂欲」、「驕慢」の邦に漂遊して、今や歸り來れる幾多の「想」と相語るに擬したり。彼等默然として頭俛れ、齎らす所只幻惑の悲音のみ。孤り此等の姉妹と道を異にしたるか、終に歸り來らざる「理想」は法苑林の樹間に「愛」と相睦み語らふならむといふに在りて、冷艶素香の美、今の佛詩壇に冠たる詩なり。

譯述の法に就ては譯者自ら語るを好まず。只譯詩の覺悟に關して、ロセツテイが伊太利古詩翻譯の序に述べたると同一の見を持したりと告白す。異邦の詩文の美を移植せむとする者は、既に成語に富みたる自國詩文の技巧の爲め、清新の趣味を犠牲にする事あるべからず。而も彼所謂逐語譯は必らずしも忠實譯にあらず。されば「東行西行雲眇々。二月三月日遲々」を「とざまにゆき、かうざまに、くもはるばる。きさらぎ、やよひ、ひうらうら」と訓み給ひけむ神託もさることながら、大江朝綱が二條の家に物張の尼が「月によつて長安百尺の樓に上る」と詠じたる例に従ひたる所多し。

明治三十八年初秋

ガブリエレ・ダンヌンチオ

燕の歌

彌生^{やよひ}ついたち、はつ燕、

海^{うみ}のあなたの静けき國の

便^{たより}もてきぬ、うれしき文^{ふみ}を。

春のはつ花、にはひを尋^とむる

あゝ、よろこびのつばくらめ。

黒と白との染分縞そめわけしまは

春の心の舞姿。

彌生來にけり、きさくらぎ如月は

風もろともに、けふ去りぬ。

栗鼠りすの毛けごろも衣脱ぎすてて、

綾子りんず羽ぶたへいまやう今いま様に、

春の川瀬をかちわたり、

しなだるゝ枝の森わけて、

舞ひつ、歌ひつ、あしはや足速の

戀慕の人ぞむれ遊ぶ。

岡に摘む花、 堇ぐさ、

草は香りぬ、 君ゆゑに、

素足の「春」の君ゆゑに。

けふは野山も新妻にひづまの姿に通ひ、

わだつみの波は輝く阿古屋珠あこやだま。

あれ、藪陰やぶかげの黒鵜くろつぐみ、

あれ、なか空そらに揚雲雀あげひばり。

つれなき風は吹きすぎて、

ふるすくは
舊巢ふるすくは啣へて飛び去りぬ。

あゝ、南國なんごくのぬれつばめ、

尾羽^{をば}は矢羽根^{やばね}よ、鳴^ねく音^{つる}は弦^{つる}を

「春」のひくおと、「春」の手^ての。

あゝ、よろこびの美^{うま}鳥^{どり}よ、

黒と白との水^{すゐ}干^{かん}に、

舞の足どり教へよと、

しばし招^{まね}がむ、つばくらめ。

たぐひもあらぬ麗^{れい}人^{じん}の

イソルダ姫の物語、

飾^{ゑが}り畫^ゑけるこの殿^{との}に

しばしはあれよ、つばくらめ。

かづけの花環こゝにあり、
ひとやにはあらぬ花籠を

給ふあえかの姫君は、

フランチェスカの前ならで、

まことは「春」のめがみ大神。
おほがみ

ものね
聲曲

われはきく、よもすがら、わが胸うへの上に、君眠る時、

吾は聴く、夜の静しづけき寂しに、滴たの落りつるを將はた、落つるを。

常にかつ近み、かつ遠み、絶間たえまなく落つるをきく、
夜もすがら、君眠る時、君眠る時、われひとりして。

ルコント・ドウ・リイル

眞ま晝ひる

「夏なつ」の帝みかどの「眞晝時まひるどき」は、大野おほのが原はらに廣ひろがりて、
 しろがねいろぬのびきをあそぞら
 白銀色しろがねいろの布引ぬのびきに、青天あそぞらくだし天降あもりしぬ。
 じやく
 寂じやくたるよもの光景けしきかな。耀かがやく虚空こくう、風絶かぜえて、
 ほのほ
 炎ほのほのころも纏まとひたる地つちの熟睡うまいの静しづこ心ころ。

眼路めぢべうばう眇ぼう茫ぼうとして極きはみ無く、樹蔭こかげも見えぬ大野おほのらや、
 牧まきの畜けものの水かひ場ば、泉いづみは涸かれて音も無し。
 野末遙のすゑけき森陰もりかげは、裾すその界さかひの線すぢ黒み、
 不動ふどうの姿すがた夢重ゆめく、寂じやく寞まくとして眠りたり。

唯熟ただしたる麥むぎの田のりは黄金海わうごんかいと連なりて、
 かぎりも波なみの搖蕩たゆたひに、眠おぞるも鈍あやと嘲あざみがほ、
 聖せいなる地つちの安やすらけき兒等こらの姿すがたを見よやとて、
 畏おそれ憚はばるけしき無く、日ひの觴さかづきを嚙くはみ干かわしぬ。

また、邂逅わくらばに吐息ねっなす心の熱ねつの穗ほに出で、

つふやきいゑ
 囁 聲 のそこはかと、鬚長 穎の胸のうへ、
 覺めたる波の揺動ゆきぶりや、うねりも貴あてにおほどかに
 起きてまた伏す行末は沙すなたち迷ふ雲のはて。

程遠まきからぬ青草の牧まきに伏したる白牛はくぎうが、
 肉しゝ置厚おきき喉のど袋ぶくろ、涎よだれに濡ぬらす慵ものうげさ、
 妙たへに氣高けだかき眼差まなざしも、世よの煩累わづらひに倦うみしごと、
 終つひに見果みてぬ内心うちの夢ちまたの衢ちまたに迷まよふらむ。

人よ、爾の心中こころを、喜怒哀樂まひるに亂みだされて、
 光明くわうみやう道の此原このはらの眞晝まひるを孤ひとり過ぎゆかば、

の
 がれよ、こゝに萬物ばんぶつは、凡すべて虚うつろぞ、日は燬やかむ。
 ものみな、こゝに命いのち無く、悦よろこびも無し、はた憂うれ無し。

されど涙なみだや笑せう聲せいの惑まどひを脱だし、萬ばん象しやうの
 流轉りてんの相さうを忘ぼうぜむと、心こゝろの渴かわいと切せちに、
 現うつ身そみの世よを赦ゆるしえず、はた詛のろひえぬ 觀くわん 念ねんの
 眼まなこ放はなちて、幽遠ゆうえんの大歡樂たいがくらくを念ねんじなば、

來きれ、此地このちの天日てんじつにこよなき法のりの言葉ことばあり、
 親おやみ難がたき炎えん上じやうの無間むげんに沈しづめ、なが思おもひ、
 かくての後は、濁世だくせいの都みやこをさして行くもよし、

物の七たびなぐ 涅槃ニルワナに浸りてひた澄みし心もて。

大饑餓

夢圓まどかなる 滄溟わだのはら、濤の卷曲うねりの搖蕩たゆたひに

夜天やてんの星の影見えて、小島をしまの群むれと輝きぬ。

紫摩黄金しまわうこんの良夜あたらよは、寂じやくまく 寞もくとしてまた幽いうに、

奇くしき畏おそれの満ちわたる海と空との原の上。

無邊むへんの天てんや無量海むりやうかい、底そこひも知らぬ深淵しんえんは

憂愁の國、じやくくわうど 寂光土、また譬ふべし、げんえうきやう 炫耀郷。

おくつき 墳塋にして、はた伽藍、かくやく 赫灼として幽遠の

だいくわうげん 大荒原のたてよこ 縦横を、あら、まんがん 萬眼のうろくづ 魚鱗や。

せいこう 青空かくも莊嚴に、だいすゐ 大水更にかみさ 神寂びて、

大光明のへんぜう 遍照に、くわうだい 宏むへんかいちう 大無邊界中に、

うつらうつらの夢枕、しよくげん 煩惱界の諸苦患も、

こゝに通はぬその夢の限も知らず大いなる。

かゝりし程に、あらはだ 粗膚のふくだみがは 蓬起皮のしなやかに

飢にや狂ふ、おどろしきふかうみぞこ 深海底のわたり魚、うを

あふさききるさの徘徊もとほりに、身の鬱憂を紛れむと、
 なんぼんてつあぎと
 南蠻鐵の腮をぞ、くわつとばかりに開いたる。

もと
 素より無邊天空を仰ぐにはあらぬ魚の身の、

からすきゆく

參の宿、みつ星や、三角星や天蝸宮、

むげん

無限に曳ける光 芒のゆくてに思馳するなく、

ほくとせいぜん

北斗星前、横はる大熊星もなにかあらむ。

唯、ひとすぢに、生肉せいにくを噛まむ、碎かむ、割かばやと、

常の心は、朱あけに染み、血の氣けに欲たを湛へつゝ、

影暗うして水重き潮の底の荒原くわうげんを、

曇れる眼まなこ、きらめかし、悽慘として遅々たりや。

こゝ虚うつろなる無聲境、浮べる物や、泳ぐもの、

生きたる物も、死したるも、此空くう漠ばくの荒野あらぬには、

音おとづれ信まも無し、影も無し。たゞ水みづ先さきの小判こばん鮫ざめ、

眞黒まの鰭ひれのひたうへに、沈々として眠るのみ。

行きね妖怪あやかし、なれが身も人間道にんげんだうに異ならず、

醜惡しうを、獰猛だうまう、暴戾ばうれいのたえて異なるふしも無し。

心安かれ、鱻ふかぎめよ、明日あすや食らはむ人間を。

又さはいへど、汝なれが身も、明日あすや食はれむ、人間に。

聖せいなる飢うゑは 正しやう法ぽふの永ながくつゞける 殺せつ生しやう業ごふ、
 かげ深ふか海かうみも光明あまの天あまつみそらもけぢめなし。
 それ人間ふかざめも、鱧ふかざめ鮫めも、殘ざん害がいの徒とこも、餌ゑ食じき等らも、
 見よ、死の神の前にして、二つながらに罪ぞ無き。

象

沙漠おとは丹たんの色にして、波漫まん々くたるわだつみの
 音おとしづまりて、日に燂やけて、熟睡うまいの床とこに伏す如く、

不動のうねり、大らかに、ゆくらくらゆくらくらに傳らむ、
 人住むあたり銅の雲たち籠むる眼路のすゑ。

命も音も絶えて無し。餌に飽きたる唐獅子も、

百里の遠き洞窟の奥にや今は眠るらむ。

また岩清水迸る長沙の央、青葉かげ、

豹も來て飲む椰子森は、麒麟が常の水かひ場。

大日輪の走せる氣重き虚空鞭うつて、

羽搔の音の聲高き一鳥遂に飛びも來ず、

たまたま見たり、蟒蛇の夢も熱きか圓寢して、

とぐるの綱を動せば、鱗うろこひかりの光まばゆきを。

一 天霽いつてんはれて、そが下したに、かゝる炎の野はあれど、
 物鬱ものとして、寂寥せきれうのきはみを盡すをりしもあれ、
 皺しわだむ象ざうの一いち群ぐんよ、太ふとしき脚あしの練歩ねりあしに、
 うまれの里の野を捨て、大沙原おほすなばらを横に行く。

地平のあたり、一團の褐色くりいろなして、列つらなめて、
 みれば砂塵さぢんを蹴立せりてつゝ、路無みちき原を直道ひたみちに、
 ゆくてのさきの障さまたげ碍げを、もどかしとてや、力ちから足あし、
 踏たづら躡らしこふむ勢いきほひに、遠をちの砂山すなやま崩たふれたり。

導しるべにたてる年としかさ嵩かさのてだれの象しるべの全身は

「時」が噛かみてし刻くみてし、老らうじゆ樹じゆの幹かんのごとひわれ

巨巖きよがんの如ごとき大おほがしら頭しら、脊骨せぼねの弓ゆみの太おほしきも、

何なにの苦くるしみも無なく自おのづから、滑ならかにこそ動うごくなれ。

歩あゆみ遅おそむることもなく、急いそぎもせず、悠然あゆみと、

塵ちりにまみれし群ぐんざう象しやうをめあての國くにに導しるべけば、

沙すなの畦あぜくろ、穴あなに穿うち、續ついて歩あゆむともがらは、

雲うみ突つく修しゆげん験げん山やま伏まぶしか、先せん達だつの蹤あと踏ふんでゆく。

耳は扇とかざしたり、鼻は象牙に介みたり、
 半眼はんがんにして迤たどりゆくその胴腹どうばらの波だちに、
 息のほてりや、汗のほけ、烟となつて散亂さんらんし、
 幾千萬の昆蟲こんちゆうが、うなりて集つどふ餌食えじきかな。

饑渴きかつの攻せめや、貪婪たんらんの羽蟲はむしの群むれもなにかあらむ、
 黒皺皮くろじわがの満身の膚はだをこがす炎暑えんじゆをや。

かの故里ふるさとをかしまだち、ひとへに夢む、道遠みちとほき
 眼路めぢのあなたに生ひ茂げる無花果いちじゆくの森、象きさの邦。

また忍ぶかな、高山たかやまの奥より落つる長水ちやうすゐに

巨大の河馬かばうそぶの嘯うそぶきて、波濤はたうたぎつる河の瀬を、
 あるは月夜げつやの清光しろうに白しろみしからだ、うちのぼし、
 水かふ岸の葦よしあし蘆あしを踏ふみ碎くだきてや、降おりたつを。

かゝる勇猛沈勇の心をきめて、さすかたや、
 涯きはみも知らぬ遠をちのすゑ、黒線くろすぢとほくかすれゆけば、
 大沙原おほすなはらは今さらに不動のけはひ、神寂かみさびぬ。
 身動みじろきうと迂たびうどき旅人の雲のはたてに消ゆる時。

ルコント・ドウ・リイルの出づるや、哲學に基ける厭世觀

は佛蘭西の詩文に致死の棺衣たれぎぬを投げたり。前人の詩、多くは一時の感慨を洩し、單純なる悲哀の想を鼓吹するに止りしかど、此詩人に至り、始めて、悲哀は一種の系統を樹て、藝術の莊嚴を帶ぶ。評家久しく彼を目するに高踏派の盟主を以てす。即ち格調定かならぬドウ・ミュツセエ、ラマルテイイヌの後に出で、始て詩神の雲髪を捉みて、之に峻嚴なる詩法の金櫛を加へたるが故也。彼常に「不感無覺」を以て稱せらる。世人輒もすれば、此語を誤解して曰く、高踏一派の徒、甘じて感情を犠牲とす。これ既に藝術の第一義を没却したるものなり。或は恐る、終に述作無きに至らむをと。あらず、あらず、此暫々濫用せらるゝ「不感無

覺」の語義を藝文の上より解する時は、單に近世派の態度を示したるに過ぎざるなり。常に宇宙の深遠なる悲愁、神祕なる歡樂を覺ゆるものから、當代の愚かしき歌物語が、野卑陳套の曲を反復して、譬へば情痴の涙に重き百葉の輕舟、今、藝苑の河流を閉塞するを敬せざるのみ。尋常世態の瑣事、奚ぞよく高踏派の詩人を動かさむ。されど之を倫理の方面より觀むか、人生に對する此派の態度、これより學ばむとする教訓は此一言に現はる。曰く哀樂は感ず可く、歌ふ可し、而も人は斯多阿學徒の心を以て忍ばざる可からずと。かの額付、物思はしげに、長髮わざとらしき詩人等も、此語には辟易せしも多かり。されば此人は藝文に劃然

たる一新機軸を出し、者にして同代の何人よりも、其詩、哲理に富み、譬喩の趣を加ふ。「カイン」「サタン」の詩二つながら人界の災殃を賦し、「イパティイ」は古代衰亡の頽唐美、「シリル」は新しき信仰を歌へり。ユウゴオが壯大なる史景を詠じて、臺閣の風ある雄健の筆を振ひ、史乗逸話の上に敘情詩めいたる豊麗を與へたと並びて、ルコント・ドウ・リイルは、傳説に、史蹟に、内部の精神を求めぬ。かの傳奇の老大家は歴史の上に燦爛たる紫雲を曳き、この憂愁の達人は其實體を闡明す。

*

讀者の眼頭に彷彿として展開するものは、豪壯悲慘なる北歐思想、明暢清朗なる希臘田野の夢、または銀光の朧々たること、其聖十字架を思はしむる基督教法の冥想、特に印度大幻夢涅槃の妙説なりけり。

*

黒檀の森茂げき此世の涯の老國より來て、彼は長久の座を吾等の傍に占めつ、教へて曰く、「寂滅爲樂」。

*

幾度と無く繰返したる大智識の教話によりて、悲哀は分類結晶して、頗る靜寧の姿を得たるも、なほ、をりふしは憤怒の激發に迅雷の轟然たるを聞く。是に於てか電火ひらめき、萬雷はためき、人類に對する痛罵、宛も藥綫の爆發する如く、所謂「不感無覺」の墻壁を破り了ぬ。

*

自家の理論を詩文に發表して、シオペンハウエルの辨證し

たる佛法の教理を開陳したるは、此詩人の特色ならむ。儕輩の詩人皆多少憂愁の思想を具へたれど、厭世觀の理義彼に於ける如く整然たるは罕まれなり。衆人徒に虚無を讚す。彼は明かに其事實なるを示せり。其詩は智の詩なり。而も詩趣饒ゆたかにして、坐そろにペラスゴイ、キユクロプスの城址を忍しのばしむる堅牢の石壁は、かの纖弱の律に歌はれ、往々俗謠に傾ける當代傳奇の宮殿を摧かむとすなり。

エミール・エルハアレン

ホセ・マリヤ・デ・エレディヤ

珊瑚礁

波の底にも照る日影、神寂さびにたる曙の
 照しの光、亞ア比ビ西シ尼ニア、珊瑚の森にほの紅く、
 ぬれにぞぬれし深ふかうみ海の谷隈たにくまの奥すきいに透入れば、
 輝あざきにほふ蟲むしのから、命いのちにみつる珠たまの華。

沃度ヨウドに、鹽しほに、き丹にづらふ海の寶たからのもろもろは
 濡髮ぬみげ長ながき海かい藻そうや、珊瑚さんご、海膽うに、苔こけまでも、
 臙脂えんじ紫むらさきあかあかと、華くわ奢しやのきはみの繪え模も樣やうに、
 薄色うすいろねびしみどり石いし、蝕むしばむ底そこぞ被おほひたる。

鱗こけの光ひかりのきらめきに白珮はくは瑯らうを曇くもらせて、
 枝えだより枝えだを横よこぎまに、何なにを尋たづぬる一いち大だい魚ぎよ、
 光すきい透すきい入いる水みづかげに慵ものうげなりや、もとほりぬ。

忽たちち紅こうく火お飄おへる思おもひの色いろの鰭ひれふるひ、
 藍あを湛たへし靜せい寂じの、かげほのぐらき青せい海かい波いは、

水みづ揺ゆりうごく揺えふ曳えいは、黄金わうごん、眞珠しんじゆ、青せいぎ玉よくの色。

床

さゝらがた錦にしんを張はるも、荒あ妙らたへの白しら布ぬ敷のくも、
悲かなしさは墳お塋くつきのごと、樂たのしさは巢あの如ごとしとも、
人生じんせいれ、人ひといの眠ねり、つま戀こふる、凡たゞべてこゝなり、
をさな兒ごも、老わかも若きも、さをとめも、妻つまも、夫おとこも。

葬はふり事ごと、まぐはひほがひ、烏くろ羽じ玉ふの黒くろ十字じ架かに、

淨きよき水はふり散らすも、祝福の枝をかざすも、
 皆みなこゝに物は始まり、皆みなこゝに事は終らむ、
 産屋うぶや洩る初日影より、臨終そくの燭の火までも、

天あま離さかる鄙ひなの伏屋ふせやも、百も敷しきの大宮内おほみやうちも、
 紫摩しま金の榮はえを盡して、紅あけに朱しゆに矜ほこり飾かざるも、
 鈍にび色いろの檜かしのつくりや、楓かへでの木、杉とこの床とこにも。

獨ひとり、かおの畏それも悔も無く眠る人こそ善うけれ、
 みおやらの生れし床に、みおやらの失うせにし床に、
 物古りし親のゆづりの大床おほどこに足を延ばして。

出征

高^{たか}山^{やま}の鳥^と栖^ぐ巢^{らす}だちし兄^{せう}鷹^うのごと、

身^みこそたゆまね、憂^{うれ}愁^んに思^しは倦^{うん}じ、

モゲルがた、パロスの港、船出^{ふねで}して、

雄^を誥^{たけ}ぶ夢^むぞ逞^{たくま}ましき、あはれ、丈^{ます}夫^{らを}。

チパンゴに在^ありと傳^{つた}ふる鑛^{かな}山^{やま}の

紫^{しま}摩^わ黄^う金^{こん}やわが物^{もの}と遠^{とほ}く求^{もと}むる

船の帆も撓しわりにけりな、時津風ときつかぜ、
西の世界の不思議なる遠荒磯とほつありそに。

ゆふべゆふべは壮大あしたの旦を夢み、
しらぬ火や、熱帯海ねつたいかいのかぢまくら、
こがね幻通まぼろしふらむ。またある時は

白妙の帆船の舳へさき、たゞずみて、
振放ふりさけみれば、雲の果、見知らぬ空や、
蒼海わだつみの底よりのぼる、けふも新星にひぼし。

夢

シュリ・プリュドン

夢のうちには、農人のうにん曰く、なが糧かてをみづから作れ、
 けふよりは、なを養はじ、土を墾ほり種を蒔けよと。
 機織はたおりはわれに語りぬ、なが衣きぬをみづから織れと。
 石造いしつくりわれに語りぬ、いざ鋤こてをみづから執れと。

かくて孤ひとり人間の群むれやはられて解とくに由なき

この咒詛のろひ、身にひき纏まとふ苦しさに、みそら仰あぎて、

いと深あはき憐愍あはれみ、慙あはれ垂たれさせ給たまへよと、禱いのりをろがむ

眼まのあたり前まへ、ゆくての途みちのたゞなかを獅子ししはふたぎぬ。

ほのぼのとあけゆく光、疑まなこひて眼まなこひらけば、

雄々はたものしかる田ふみきつくり男、梯はし立だてに口笛くちふえ鳴ならし、

繪具えぐの躑ふみき木きもとどろ、小山田たねに種まぞ蒔まきたる。

世さちの幸さいを今はた識しりぬ、人ひとの住すむこの現うつしよ世よに、

誰たれかまた思おもひあがりて、同はらから胞はらを凌あぎえせむや。

其日より吾はなべての世の人を愛しそめけり。

シャルル・ボドレエル

をきのたいふ
信天翁

波路遙けき徒つれづれ然なの慰なぐさめぐさ草くさと船ふなびと人は、
 八重やえの潮路うみどりの海鳥うみどりの沖おきの太夫たいふを生いけど擒とりぬ、
 楫かぢの枕まくらのよき友ともよ心こころ閑ひまけき飛鳥ひてうかな、
 奥津おくつ潮騒しほざめすべりゆく舷ふなばた近くむれ集つどふ。

たゞ甲^{かふはん}板^{ばん}に据^{すま}ゑぬればげにや笑^{せうし}止^{きはみ}の極^{きはみ}なる。

この青^{あをぐも}雲^もの帝^{てい}王^{わう}も、足^{あし}どりふらゝ、拙^{せつ}くも、

あはれ、眞^ま白^{しろ}き双^{さう}翼^{よく}は、たゞ徒^たらに廣^{ひろ}ごりて、

今は身^みの仇^{あや}、益^{やく}も無^なき二^につ^つの權^{けん}と曳^ひきぬらむ。

天^{あま}飛^とぶ鳥^{とり}も、降^{くだ}りては、やつれ醜^{みにく}き瘠^{やせ}姿^{すがた}、

昨^{きのふ}日^ふの羽^は根^ねのたかぶりも、今はた鈍^{おそ}に痛^{いた}はしく、

煙^{きせる}管^{はし}に嘴^{くちばし}をつゝかれて、心^{こころ}無^{なし}には嘲^{あざわら}けられ、

しどろの足^{あし}を摸^まねされて、飛^{ひぎ}行^{やう}の空^{あか}に憧^{あこ}がるゝ。

雲^{うん}居^ぐの君^{きみ}のこのさまよ、世^よの歌^{うた}人^{びと}に似^にたらずや、

暴風雨あらしを笑ひ、風凌さつぎ獵男をの弓をあざみしも、
 地つちの下界げかいにやはられて、勢子せこの叫こゑに煩わづらへば、
 太さうしき双さうの羽根はねさへも起居たちみ妨さぐ足あしまとひ。

薄暮くれがたの曲きよく

時ときこそ今は水枝みづえさす、こぬれに花はなの顛かぶふころ、
 花は薰かほじて追風おひかぜに、不斷つぎの香かの爐かまどに似にたり。
 匂におも音ねも夕空ゆふぞらに、とうとうたたり、とうたたり、
 ワルツの舞まの哀あはれさよ、疲れ倦うみたる眩暈くるめきよ、

花は薰じて追風に、不斷の香の爐に似たり。

瘕きずに惱める胸もどき、ガクオロン樂すががきの清搔すががきや、

ワルツの舞の哀れさよ、疲れ倦くみたる眩暈くるめきよ、

神輿みこしの臺をさながらの雲悲えんみて艶えんだちぬ。

瘕きずに惱める胸もどき、ガクオロン樂すががきの清搔すががきや、

闇みこしの涅槃ねはんに、痛えんましく惱えんまされたる優やさごころ心。

神輿みこしの臺をさながらの雲悲えんみて艶えんだちぬ、

日や落入りて溺るゝは、凝こびるゆふべの血潮ちしほぐも雲。

闇の涅槃ねはんに、痛ましく悩まされたる優心やさこころ、
 光の過去のあとかたを尋とめて集むる憐れさよ。
 日や落入りて溺るゝは、凝こびるゆふべの血潮雲ちしほぐも、
 君が名残のたゞ在るは、ひかり輝く聖體盒せいたいごふ。

破鐘やれがね

悲かなしくもまたあはれなり、冬の夜の地爐あろりの下もとに、
 燃えあがり、燃え盡きにたる柴の火に耳傾けて、
 夜霧だつ闇夜の空の寺の鐘、きゝつゝあれば、

過ぎし日のそこはかとなき物思ひやをら浮びぬ。

喉太の古鐘のどぶと ふるがねきけば、その身こそうらやましけれ、
 老らくの齡おい としにもめげず、健やかに、忠なる聲の、
 何時もいつも、梵音ほんのんたへ妙に深くして、穩どかなるは、
 陣營の歩哨にたてる老兵の姿に似たり。

そも、われは心破れぬ。鬱憂のすさびごとちさむぞら よるに、
 寒空の夜に響けと、いとせめて、鳴りよそふとも、
 覺束な、音ねにこそたてれ、弱聲よわごゑの細音ほそねも哀れ、

哀れなる臨終いまはの聲こゑは、血の波みづうみの湖うみの岸、
 小山かばねなす屍もとの下みじろぎに、身動みじろぎもえならで死うする、
 棄ててられし負傷ておひの兵の息絶つひゆる終うめきの呻吟うめきか。

人と海

こゝろ自由まよなる人間まよは、とはに賞めづらむ大海おほうみを。
 海こそ人の鏡かがみなれ。灘の大波なみだはてしなく、
 水みづや天そらなるゆらゆらは、うつし心の姿すがたにて、
 底そこひも知らぬ深ふかうみ海の潮うしほの苦味にがみも世よといづれ。

さればぞ人は身を映す鏡の胸に飛び入りて、
まなこ眼に抱き腕にいだき、またある時は村肝の
 心もともに、はためきて、潮騒しほざゐ高く湧くならむ、
 寄せてはかへす波の音の、物狂おとほしき歎息なげかひに。

海も爾いましもひとしなみ、不思議をつゝむ陰なりや。
 人よ、爾いましが心しんちゆう中の深淵探りしものやある。
 海よ、爾いましが水底みなぞこの富を數へしものやある。
 かくも妬ねたげに祕事ひめごとのさはにもあるか、海と人。

かくて劫ごふしよ初の昔より、かくて無数の歳月を、

慈悲悔恨の弛ゆるみ無く、修羅しゆらの戦酣たふなはに、

げにも非命と殺戮さつりくと、なじかは、さまで好もしき、

噫、永遠のすまうどよ、噫、怨念をんねんのはらからよ。

梟

黒葉水松くろばいちるの木下闇このしたやみに

並んでとまる梟ふくろは

昔の神をいきうつし、

赤眼あかめむきだし思案顔。

體たいも崩さず、ちつとして、

なにを思ひに暮がたの

傾ひあしく日脚推しこかす

大凶おほまがとき時となりにけり。

鳥のふりみて達人は

道の悟や開くらむ、

世に忌々ゆゝしきは煩惱と。

しきさうかい
色相界の妄執まうしふに

しよにん
諸人のつねのくるしみは

きよやすん
居きよやすんに安ぜぬあだ心。

現代の悲哀はボドレエルの詩に異常の發展を遂げたり。人或は一見して云はむ、これ僅に悲哀の名を變じて鬱悶さつもんと改めしのみと、而も再考して終に其全く變質したるを曉さとらむ。ボドレエルは悲哀に誇れり。即ち之を詩章の龍蓋帳中に据ゑて、黒衣聖母の觀あらしめ、絢爛なること繪畫の如き幻想と、整美なること彫塑に似たる夢思とを恣にして之に生

動の氣を與ふ。是に於てか、宛もこれ絶美なる獅身女頭獸なり。悲哀を愛するの甚しきは、いづれの先人をも凌ぎ、常に悲哀の詩趣を讚して、彼は自ら「悲哀の煉金道士」と號せり。

*

先人の多くは、惱心地定かならぬまゝに、自然に對する心中の愁訴を、自然其物に捧げて、尋常の失意に泣けども、ボドレエルは然らず。彼は都府の子なり。乃ち巴里叫喊地獄の詩人として胸奥の悲を述べ、人に叛き世に抗する數奇

の放浪兒が爲に、大聲を假したり。其心、夜に似て暗愴、いひしらず、汚れにたれど、また一種の美、たとへば、濁江の底なる眼、哀憐悔恨の凄光を放つが如きもの無きにもあらず。

エミイル・エルハアレン

ボドレエル氏よ、君は藝術の天にたぐひなき凄慘の光を與へぬ。即ち未だ曾て無き一の戦慄を創成したり。

中クトル・ユウゴオ

ポオル・エルレエヌ

譬^ひ喩^ゆ

主は讚^ほむべき哉、無^む明^{みやう}の闇や、憎^{にく}多^みき

今の世にありて、われを信徒となし給ひぬ。

願はくは吾に與へよ、力と沈勇とを。

いつまでも永く狗^い子^ぬのやうに従ひてむ。

生いけにへ贄の羊、その母のあと、従ひつつ、

何の苦もなく、牧草ぼくさうを食はみ、身に生ひたる

羊毛のほかに、その刻とき來ぬれば、命をだに

惜まずして、主に奉る如くわれもなさむ。

また魚とならば、御子みこの頭かしら象がたどりもし、

驢馬ともなりては、主を乗せまつりし昔思ひ、

はた、わが肉より穰はらひ給あひし豕いのこを見いづ。

げに末つ世の反抗表裏の日にありては

人間よりも、畜生の身ぞ信深くて

心^{すなほ}素直にも忍^{にんにく}辱の道守るならむ。

よくみるゆめ

常によく見る夢乍ら、奇^あやし、懐^{なつ}かし、身にぞ染む。

曾ても知らぬ女^{ひと}なれど、思はれ、思ふかの女^{ひと}よ。

夢見る度のいつもいつも、同じと見れば、異りて、

また異^{ことな}らぬおもひびと、わが心^{こゝろ}根^ねや悟りてし。

わが心根を悟りてしかの女^{ひと}の眼に胸のうち、

噫、彼女かのひとにのみ内ない證しょうの祕めたる事ぞ無かりける。

蒼ざめ顔のわが額、しとゞの汗を拭ひ去り、

涼しくなさむ術すべあるは、玉の涙のかのひとよ。

栗色髪あかげのひとなるか、赤髪あかげのひとか、金髪か、

名をだに知らね、唯思ふ朗ら細音ほそねのうまし名は、

うつせみの世を疾とく去りし昔の人の呼名よびなかと。

つくづく見入る眼差まなざしは、匠たくみが彫りし像の眼か、

澄みて、離れて、落居たる其音おん聲じやうの清すしさに、

無言むごんの聲の懐かしき戀ふししき節の鳴り響く。

らくえふ
落葉

秋の日の
中オロンの
ためいきの
身にしみて
ひたぶるに
うら悲し。

鐘のおとに

胸ふたぎ

色かへて

涙ぐむ

過ぎし日の

おもひでや。

げにわれは

うらぶれて

こゝかしこ

さだめなく

とび散らふ
おちば
落葉かな。

佛蘭西の詩はユウゴオに繪畫の色を帶び、ルコント・
ドウ・リイルに彫塑の形を具へ、エルレエヌに至りて
音樂の聲を傳へ、而して又更に陰影の匂なつかしきを
捉へむとす。

譯者

良心

キクトル・ユウゴオ

かはごろもまと
革衣纏へる兒等を引具ひきぐして

髪おどろ色蒼ざめて、降る雨を、

エホバよりカインは離さかり迷ひいで、

夕闇の落つるがまゝに愁しうねん然と、

大原おほはらの山の麓にたどりつきぬ。

妻は倦み兒等も疲れて諸聲もろごゑに、

「地つちに伏していぎ、いのねむ」と語りけり。

山陰やまかげにカインはいねず、夢おぼろ、

烏羽玉やみよの暗夜やみよの空を仰ぎみれば、

廣大てんがんの天てん眼がんくわつと、かしこくも、

物陰の奥より、ひしと、みいりたるに、

わなゝきて「未だ近し」と叫びつつ、

倦みし妻、眠れる兒等を促して、

もくねんと、ゆくへも知らに逃のがれゆく。

かゝなべて、日みそかには三十日よ、夜みそよは、三十夜、

色變へて、風の音にもをのゝきぬ。

やははれの、伏眼ふしめの旅は果もなし、

眠なく休いこひもえせで、はろばろと、

後の世のアシユルの國、海のほとり、

荒磯ありそにこそはつきにけれ。「いぎ、こゝに

とゞまらむ。この世のはてに今ぞ來こし、

いぎ」と、いへば、陰雲暗きめぢのあなた、

いつも、いつも、天てん眼がんひしと睨にらみたり。

おそれみに身も世もあらず、戦をのきて、

「隠せよ」と叫いっせいぶ一こ聲ら。兒等こらはただ

猛き親を口に指あて眺めたり。

沙漠の地、毛織の幕に住居する

後の世のうからのみおやヤバルにぞ

「このむたに幕ひろげよ」と命ずれば、

ひるがへる布の高壁めぐらして

鉛もて地に固むるに、金髪の

孫むすめ曙のチラは語りぬ。

「かくすれば、はや何も見給ふまじ」と。

「否まなこなほも眼まなこ睨む」とカインいふ。

角かくを吹つゞみき鼓つゞみをうちて、城きのうちを

ゆきめぐる民たみぐさ草のおやユバルいふ、

「おのれ今固かたき守まもりや設たてけむ」と。

銅あかの壁かべ築つき上げて父の身を、

そがなかに隠しぬれども、如何いかにせむ、

「いつも、いつも眼まなこ睨む」といらへあり。

「恐しき塔をめぐらし、近よりの

難きやうにすべし。砦とりで守る城しろ築あげて、

その邑まちを固くもらむ」と、エノクいふ。

鍛冶の祖おやトバルカインは、いそしみて、

宏大の無邊むへん都とし城やうを營むに、

同はら胞からは、セツの兒こ等ら、エノスの兒等をを、

野邊まなこかけて狩かり暮くらしつゝ、ある時は

旅人の眼まなこをくりて、夕されば

星せい天てんに征矢そやを放ちぬ。これよりぞ、

みかげいし、とぼり
花崗石、帳に代り、くろがねを

石にくみ、城きの形、冥府みやうふに似たる

塔影は野を暗うして、その壁ぞ

山のごと厚くなりける。工成りて

戸を固め、壁建終り、大城戸おほきどに

刻める文字を眺むれば「このうちに

神はゆめ入る可からず」と、ゑりにたり。

さて親は石殿せきでんに住すまはせたれど、

憂愁のやつれ姿ぞいぢらしき。

「おほぢ君、眼は消えしや」と、チラの間へば、

「否、そこに今もなほ在り」と、カインいふ。

「墳塋おくつきに寂しく眠る人のごと、

地の下にわれは住すまはむ。何物も

われを見じ、吾われも亦何をも見じ」と。

さてこゝに坑あなを穿うがてば「よし」といひて、

たゞひとり闇穴道あんけつだうにおりたちて、

物陰の座にうちかくる、ひたおもて、

地下ちげの戸を、はたと閉づれば、こはいかに、

天眼てんがんなほも奥津城おくつきにカインを眺む。

ユウゴオの趣味は典雅ならず、性情奔放にして狂飈激浪の

如くなれど、温藉静冽の氣自から其詩を貫きたり。對聯比
照に富み、光彩陸離たる形容の文辭を疊用して、燦爛たる
一家の詩風を作りぬ。

譯者

フランソア・コペエ

禮拜

さても千八百九年、サラゴサの戦^{たゝかひ}、

われ時に軍曹なりき。此日慘憺を極む。

街^{まち}既に落ちて、家を圍むに、

閉ぢたる戸毎に不順の色見え、

鐵火、窓より降りしきれば、

「憎つくき僧徒の振舞」と

かたみに低く罵りつ。のゝし

明方あけがたよりの合戦に

眼は硝煙に血走りて、

舌には苦がき紙筒はやごうを

噛み切る口の黒くとも、

奮闘いきほむの氣はいや益しに、

勢猛いきほむに追ひ迫り、

黒衣こくい長袍ふち廣き帽を狙撃す。

狭き小路こうじの行進に

とぎま、かうざま顧みがち、

われ軍曹の任にんにしあれば、

精兵従へ推しゆく折りしも、

忽こつねん然として中なかぞらあか天赤く、

鑛くわうろ爐の紅こうぜつ舌さながらに、

虐殺せらるゝ婦女の聲、

遙かには轟々の音とよもして、

歩ぶつと毎に伏屍ふくし累々たり。

屈こげんでくぐる軒下を

出でくる時は銃劍の

鮮血淋漓たる兵が、

血ちべに紅に染みし指をもて、

壁に十字を書置くは、

敵潜めるを示すなり。

鼓うたせず、足重く、

將校たちは色曇り、

さすが、てだれ手練のふるつはもの舊兵も、

落居ぬけはひに、寄添ひて、

新兵もどきの胸さわぎ。

忽ち、とあるきよくかく曲角に、

援兵と呼ぶ佛語の一聲、

それ、戦友の危急ぞと、

驅けつけ見れば、きたなしや、

ひごろ

日常は猛たけき勇士等も、

しやうじや

精舎の段の前面に

たゞ僧兵の二十人、

ゑんちやう

圓頂こつきの黒鬼に、くひとめらる。

眞白の十字胸につけ、

靴無き足の凜々しきよ、

血染かひなの腕かひな巻きあげて、

大十字架にて、うちかゝる。

惨絶、壯絶。それと一齊射撃にて、

やがては掃蕩したりしが、

冷然として、残忍に、軍は倦みたり。

皆心中に疾やましくて、

とかくに殺戮したれども、

醜行すで已に爲し了はり、

密雲漸く散ずれば、

積みかさなれる屍より

階きざはしかけて、紅べに流れ、

そのうしろ樓門聳ゆ、巍然として鬱たり。

燈明くらがりに金こんじき色の星ときらめき、

香爐かぐはしく、靜寂の香かを放ちぬ。

殿上、奥深く、神壇に對^{むか}ひ、

歌樓^{からう}のうち、やさけびの音^{おと}しらぬ顔、

蕭^{しめ}やかに勤^{ごんぎ}行^{やう}營む白髮長身の僧。

噫^{おも}けふもなほ^か梯^げにして浮びこそすれ、

モオル 廊の古院、

黒衣僧兵のかばね、

天日、石だゝみを照らして、

紅流^{けぶり}に烟^{けぶり}たち、

朧^{ろう}々たる低き戸^{かまち}の框^{かまち}に、

立つや老僧。

神壇龕^{づし}のやうに輝き、

唾然としてすくみしわれらのうつけ姿。

げにや當年の己は

空恐ろしくも信心無く、

或日精しやうじや舎の奪掠に

負けじ心の意氣張つよく

神壇近き御燈みあかしに

煙草つけたる亂行者らんぎやうもの、

上反鬢うはぞりひげに氣負きおひみせ、

一步も譲らぬ氣象のわれも、

たゞ此僧の髮白く白く

神寂びたるに畏みぬ。

「打て」と士官は號令す。

誰有て動く者無し。

僧は確に聞きたらむも、

さあらぬ素振そぶり神々しく、

聖水大盤たいばんを捧げてふりむく。

ミサ禮らいはいなかば拜半に達し、

司僧しそうむき直る祝福の時、

腕かひなは伸べて鶴翼かくよくのやう、

衆皆一步たじろきぬ。

僧はすこしもふるへずに

信徒の前に立てるやう、

妙音よどみ濼なく、和讃わさんを詠じて、

「歸命頂禮」の歌、常に異らず、

聲もほがらに、

「全能の神、爾等を憐み給ふ。」

またもや、一聲あらゝかに

「うて」と士官の號令に

進みいでたる一卒は

隊中なうて有名の卑怯者、

銃執りなほして發砲す。

老僧、色は蒼みしが、

沈勇の眼明らかに、

祈りつゞけぬ、

「父と子と。」

續いて更に一發は、

狂氣のさたか、血迷か、

とかくに業は了りたり。

僧は隻腕、壇にもたれ、

明いたる手にて祝福し、

黄金盤わうごんばんも重たげに、

虚空こくうに恩赦おんしやの印しるしを切りて、

音聲おんじやうこそは微かすかなれ、

※げきたる堂上たうじやうとほりよく、

瞑目めいもくのうち述のぶるやう、

「聖靈と。」

かくて仆たふれぬ、禮拜らいはいの事こと了はりて。

盤ばんは三たび、床上じやうじやうに跳りぬ。

事に慣れたる老兵も、

胸おそれに鬼胎をかき抱き

足に兵器を投げ棄てて

われとも知らず膝つきぬ、

醜行のまのあたり、

殉教僧のまのあたり。

聊れうじ爾なりや「アアメン」と

うしろに笑ふ、わが隊の鼓手。

牟ルヘルム・アレント

わすれなぐさ

ながれのきしのひもとは、
みそらのいろのみづあさぎ、
なみ、ことごとく、くちづけし
はた、ことごとく、わすれゆく

山のあなた

カアル・ブッセ

山のあなたの空遠く

さいはひ
「幸」住むと人のいふ。

噫、われひと々と尋めゆきて、

涙さしぐみかへりきぬ。

山のあなたになほ遠く

「幸^{さいはひ}」住むと人のいふ。

春

森は今、花さきみだれ
艶^{えん}なりや、五月^{さつき}たちける。
神よ、擁護^{おうご}をたれたまへ、
あまりに幸^{さち}のおほければ。

パウル・バルシュ

やがてぞ花は散りしほみ、

艶^{えん}なる時も過ぎにける。

神よ擁護^{おうご}をたれたまへ、

あまりにつらき災^{とが}な來^こそ。

秋

オイゲン・クロアサン

けふつくづくと眺むれば、
かなしみいろち
悲の色口くちにあり。

たれもつらくはあたらぬを、
なぜに心の悲める。

秋あき風かぜわたる 青木立あをこたち

葉なみふるひて地にしきぬ。

きみが心のわかき夢

秋の葉となり落ちにけむ。

ヘリベルタ・フォン・ポシンゲル

わかれ

ふたりを「時」^{とき}がさきしより、

晝は事なくうちすぎぬ。

よろこびもなく悲まず、

はたたれをかも怨むべき。

されど夕闇おちくれて、
星の光のみゆるとき、
病の床のちごのやう、
心かすかにうめきいづ。

テオドル・ストルム

水無月

子守歌風に浮びて、

暖かに日は照りわたり、

田の麥は足穂たりほうなだれ、

茨には紅き果熟し、

野面のもせには木の葉みちたり。

いかにおもふ、
わかきをみなよ。

ハイブリット・ハイネ

花をとめ

妙たへに清らの、あゝ、わが兒こよ、

つくづくみれば、そゞろ、あはれ、

かしらや撫でゝ、花の身の

いつまでも、かくは清らなれと、

いつまでも、かくは妙たへにあれと、

いのらまし、花のわがめぐしご。

ルビンスタインのめでたき樂譜に合せて、ハイネの名歌を
譯したり。原の意を汲みて餘さじと、つとめ、はた又、句
讀停音すべて樂譜の示すところに従ひぬ。 譯者

ロバート・ブラウニング

瞻望せんぼう

おそ
怖るゝか死を。——喉塞のどふたぎ、

おもわに狭霧さぎり、

みゆき
深雪降り、木枯荒れて、著しるくなりぬ、

すゑの近さも。

よる
夜の稜威暴風みいづあらしの襲來おそひ、恐ろしき

敵の屯たむろに、

現身うつそみの「大畏怖だいゐふ」立てり。しかすがに

猛たけき人は行かざらめやも。

それ、旅は果て、峯は盡きて、

障しやうげ礙やは破れぬ、

唯、すゑの譽ほまれむくひの酬えむとせば、

なほひと戦いくさ。

戦たゝかひひは日ごろの好このみ、いざゝらば、

終をはりの晴はれの勝負せむ。

なまじひに眼まなこふたぎて、赦ゆるるされて、

這はひ行くは憂うれし、

否、のこり残なく味あぢはひて、かれも人なる

いにしへの猛者もさたちのやう、

やおもて

うましよ

さむさ

くるしみ

くらやみ

矢表みづかに立ち樂世たのしみの寒冷、

苦痛、

暗黒の

みつぎ

貢のあまり捧げてむ。

そも勇者には、忽然こつねんと禍福わざはひに轉ずべく

やみ闇は終らむ。

四大しだいのあらび、忌々ゆるしかる羅刹らせつの怒號どがう、

ほそりゆき、雜まじりけち

變化へんげして苦くも樂らくとならむとやすらむ。

そのとき 光くわう 明みやう、その時御胸みむね、

あはれ、心の心とや、抱いだきしめてむ。

そのほかは神のまにまに。

出現

苔むしろ、飢ゑたる岸も

春來れば、

つと走る光、そらいろ、

菫咲く。

村^{むらぐも}雲のしがむみそらも、

こゝかしこ、

やれやれて影はさやけし、

ひとつ星。

うつし世の命を耻はぢの

めぐらせど、

こぼれいづる神のゑまひか、

君がおも。

岩陰に

一

嗚呼、物古りしものふ鳶色とびいろの「地」ちの微笑ほゝゑみの大きおほやかに、
 親したしくもあるか、今朝けさの秋あき、偃曝ひなたぼこりに其骨そのほねを
 延のばし横よこたへ、膝節ひざぶしも足も、つきいで、漣さざなみの
よろこ悦よろこび勇そみ、小躍こをどりに越こゆるがまゝに浸ひたりつゝ、
そぼださて欹そぼだつる耳みみもとの、さゞれの床とこの海雲雀うみひばり、
にこげ和毛にこげの胸むねの白妙しろたへに嘖てんずる聲こゑのあはれなる。

二

この教こそ神かんながら舊ふるるき眞まことの道と知しれ。

翁おきなびし「地ち」の知りて笑ゑむ世こゝろの試こころぞかやうなる。

愛を捧たげて價ね値うちあるものゝみをこそ愛ましなば、

愛は完またき益まにして、必まらずや、身まの利とならむ。

思おもひの痛いみ苦くみに、卑いやしきこゝろ清きめたる

なれ自らを地ちに捧たげ、酬むくひは高たき天あまに求もとめよ。

春の朝

時は春、

日は朝、
あした

あした朝は七時、

かたをか片岡に露みちて、

あげひばり揚雲雀なのりいで、

かたつむり蝸牛枝に這はひ、

神、そらに知しろしめす。

すべて世は事なも無し。

至上善

蜜蜂ふくろの囊ふくろにみてる 一歳ひととせの香にほひも、花も、

寶玉あこやの底がひうつに光れる 鑛山かなやまの富も、不思議も、

阿古屋あこや貝映がひうつし藏かくせるわだつみの陰かげも、光も、

香にほひ、花、陰、光、富、不思議、及およぶべしやは、

玉ぎよくよりも輝まことく眞、

珠たまよりも澄みたる信義、

天地あめつちにこよなき眞まこと、澄すみわたる一いちの信義は

をとめこの清きくちづけ。

ブラウニングの樂天説は、既に二十歳の作「ポオリイン」に顯れ、「ピパ」の歌、「神、そらにしろしめす、すべて世は事も無し」といふ句に綜合せられたれど、一生の述作皆人間終極の幸福を豫言する點に於て一致し「アソランドオ」絶筆の結句に至るまで、彼は有神論、靈魂不滅説に信を失はざりき。此詩人の宗教は基督教を元としたる「愛」の信仰にして、尋常宗門の繩墨を脱し、教外の諸法に對しては極めて宏量なる態度を持せり。神を信じ、其愛と其力とを信じ、之を信仰の基として、人間恩愛の神聖を認め、精進の理想を妄なりとせず、藝術科學の大法を疑はず、又人心に善惡の奮闘争鬪あるを、却て進歩の動機なりと思惟

せり。而してあらゆる宗教の教義には重を措かず、たゞ基督の出現を以て説明すべからざる一の神祕となせるのみ。

曰く、宗教にして、若し、萬世不易の形を取り、萬人の爲め、豫め、劃然として具へられたらむには、精神界の進歩は直に止りて、厭ふべき凝滯はやがて來らむ。人間の信仰は定かならぬこそをかしけれ、教法に完了といふ義ある可からずと。されば信教の自由を説きて、寛容の精神を述べたるもの、「聖十字架祭」の如きあり。殊に晩年に莅みて、教法の形式、制限を脱却すること益著るく、全人類に亘れる博愛同情の精神愈盛なりしかど、一生の確信は終始毫も渝ること無かりき。人心の憧がれ向ふ高大の理想は神の愛

なりといふ中心思想を基として、幾多の傑作あり。「クレオン」には、藝術美に倦みたる希臘詩人の永生に對する熱望の悲音を聞くべく、「ソオル」には、事業の永續に不老不死の影ばかりなるを喜ぶ事の果敢なき夢なるを説きて、更に個人の不滅を斷言す。「亞刺比亞の醫師カアシツシユの不思議なる醫術上の經驗」といふ尺牘體には、基督教の原始に遡りて、意外の側面に信仰の光明を窺ひ、「沙漠の臨終」には神の權化を目撃せし聖約翰の遺言を耳にし得べし。然れども是等の信仰は、盲目なる狂熱の獨斷にあらず、皆冷靜の理路を辿り、若しくは、精練、微を穿てる懷疑の坩堝を経たるものにして「監督ブルウグラムの護法論」

「フェリシユタアの念想」等之を證す。之を綜ぶるに、ブラウニングの信仰は、精神の難關を凌ぎ、疑惑を排除して、光明の世界に達したるものにして永年の大信は世を終るまで動かざりき。「ラ、セイジャス」の秀什、この想を述べて餘あり、又、千八百六十四年の詩集に收めたる「瞻望」の歌と、千八百八十九年の詩集「アソランドオ」の絶筆とは此詩人が宗教觀の根本思想を包含す。

譯者

中リアム・シエイクスピア

花くらべ

燕も來ぬこに水仙花、

大寒おほさむこさむ三月の

風にもめげぬ凜々りしさよ。

またはジユノウのまぶたより、

キイナス神がみの息いきよりも

なほ朧らふたくもありながら、

堇の色のおぼつかな。

照る日の神も仰ぎえで

嫁とつぎもせぬに散りはつる

色蒼いろあをざめし 櫻さくらさう草、

これも少女をとめの習ならひかや。

それにひきかへ九輪くりんさう草、

編笠あみがさ早百合ささゆり氣がつよい。

百合もいろいろあるなかに、

鳶尾いちはつぐさ草のよけれども、

あゝ、今は無し、しよんがいな。

クリスティナ・ロセツテイ

花の教

心をとめて窺へば花おのづか自ら教あり。

朝あさつゆ露の野薔薇のいへる、

「艶えんなりや、われらの姿、

刺とげに生おふる色いろか香とも知れ。」

麥むぎふ生のひまに罌粟けしのいふ、

「せめては紅あかきはしも見よ、

そばめられたる身なれども、

験げんある露の薬水を

盛りさゝげたる盃ぞ。」

この時、百合は追風に、

「見よ、人、われは言葉なく

法を説くなり。」

みづからなせる葉陰より、

聲もかすかにすみれぐさ 菫草、

「人はあだなる香かをきけど、

われらの示す教をしさと曉らじ。」

ダンテ・ゲブリエル・ロセツティ

小曲

小曲は刹那をとむる 銘しるし文ぶみ、また譬たとふれば、
 過ぎにしも過ぎせぬ過ぎしひと時に、劫げこふの「心」の
 捧げたる 願ぐわんもん文もんにこそ。光り匂ふ法のりの會あひのため、
 祥さがもなき預かねごと言ごのため、折からのけぢめはあれど、
 例いっも例いっも堰せきあへぬ思おも豊ゆたかにて切せちにあらなむ。

「日」の歌は象牙にけづり、
 「夜」の歌は黒檀に彫り、
 頭なる華のかざしは輝きて、
 阿古屋の珠と、
 照りわたるきらびの榮の藹たさを「時」に示せよ。

小曲は古泉の如く、
 そが表、心あらはる、

うらがねをいづれの力しろすとも。
 あるは「命」の

威力あるもとめの貢、
 あるはまた貴に妙なる

「戀」の供奉にかづけの纏頭と贈らむも、
 よし 遮 莫、

三瀬川、船はて處、
 陰暗き伊吹の風に、

「死」に拂ふ渡のしろと、
 船人の掌にとらさむも。

戀の玉座

心のよしと定めたる「力」かずかず、たぐへみれば、

「眞」の唇はかしこみて「望」の眼、天仰ぎ

「譽」は翼、音高に埋火の「過去」煽ぎぬれば

飛火の焰、紅々と炎上のひかり忘却の

去なむとするを驚し、飛び翔けるをぞ控へたる。

また後朝に巻きまきし玉の柔手の名残よと、

黄金くしげのひとすぢを肩に残し、「若き世」や、

「死出」の挿頭と、例も例もあえかの花を編む「命」。

「戀」の玉座は、さはいへど、そこにしも在じ、空遠く、
 逢瀬、別の辻風のたち迷ふあたり、離りたる
 夢も通はぬ遠づくに、無言の局奥深く、
 設けられたり。たとへそれ、「眞」は「戀」の眞心を
 夙に知る可く、「望」こそ、それを預言し、「譽」こそ
 そがためによく、「若き世」めぐし、「命」惜しとも。

春の貢

草うるはしき岸うへの上に、いと美はしき君が面おも、

われは横よこたへ、その髪を二つにわけてひろぐれば、

うら若草のはつ花も、はな白しろみてや、黄金こがねなす

みぐしの間ひまのこゝかしこ、面おも映はげにも覗のぞくらむ。

去年こぞとやいはむ今年とや年の境さかひもみえわかぬ

けふのこの日や「春」の足な、半なかたゆたひ、小李こすもの

葉もなき花の白しろ妙たへは雪間ゆきまがくれに迷まどはしく、

「春」住む庭あづまの四阿屋あづまやに風の通路かよひちひらけたり。

されど卯月の日の光、けふぞ谷間に照りわたる。

仰まなこぎて眼閉まなこぢ給へ、いざくちづけむ君が面おも、

みづえこえだ
水枝小枝にみちわたる「春」をまなびて、わが戀よ、
温かき喉のど、熱き口、ふれさせたまへ、けふこそは、
契もかたきみやづかへ、戀の日なれや。冷かに
つめたき人は永とこしへ久くのやはれ人と貶おとし憎まむ。

ダンテ・アリギエリ

心も空に

心も空に奪はれて物のあはれをしる人よ、

今わが述ぶる言の葉の君の傍かたへに近づかば

心に思ひ給ふこと應いさへ給ひね、洩れなくと、

綾あやに畏かしこき大御神おほみかみ「愛」の御名みなもて告げまつる。

さても星影きらゝかに、更け行く夜も三つ一つ
 ほとほと過ぎし折しもあれ、忽ち四方は照渡り、
 「愛」の御姿うつそ身に現はれいでし不思議さよ。
 おしはかるだに、その性の恐しときく荒神も

みけしき 御氣色いとゞ麗はしく在すが如くおもほえて、
 みて 御手にはわれが心の臓、御腕には貴やかに
 あえかの君の寢姿を、衣うちかけて、かい抱き、

うご やをら動かし、交睫の醒めたるほどに心の臓、
 おそ おそ さらば、かの君も恐る恐るに聞しけり。

「愛」
は乃^{すな}ち馳^はせ走^さりつ、
馳^はせ走^さりながら打泣^なきぬ。

鷺の歌

エミイル・エルハアレ

ほのぐらき^{こがね}黄金^{こもりぬ}隠沼、
骨^{かうほね}蓬の白くさけるに、
静かなる鷺^{さぎ}の羽風は
徐^{おもむろ}に影を落しぬ。

水の面おもに影たゞよは漂たゞよひ、

廣ひろごりて、ころもに似たり。

天あめなるや、鳥かよひぢの通路、

羽おとばたきの音おともたえだえ。

漁すなどり子のいと賢さかしらに

清きよらなる網あみをうてども、

空そら翔かける奇くしき翼よくの

おとなひをゆめだにしらず。

また知らず日に夜よをつぎて

溝みぞのうち泥どろ土つちの底

鬱憂ふさの網かたに待つもの

久ひさ方かたの光ひかりに飛ぶを。

ボドレエルにほのめき、エルレエヌに現はれたる詩風はこゝ
に至りて、終に象徴詩の新體を成したり。此「鷺の歌」以
下、「嗟嘆」に至るまでの詩は多少皆象徴詩の風格を具ふ。

譯者

法の夕のりゆふべ

夕日の國は野も山も、その「平安」や「寂寥」の
ねづみ黝けぬのの色おほの毛布おほもて掩おほへる如く、物さ寂さびぬ。
ばんぶつなべ萬物とくの凡とくのて整とくのふり、折とくのりめ正とくのしく、ぬめらかに、
かたち物の象かたちも筋かたちめよく、ビザンチン繪ゑの式かたの如ごと。

時雨しくれむらさめ村雨なかぞら、中空なかぞらを雨やかさずの矢數やかさずにつんざきぬ。
 見よ、一天いつてんは紺こんじやう青らうの伽藍らうの廊らうの色らうにして、

今こそ時は西山せいざんに入日傾く夕まぐれ、
 日の金色こんじきに烏羽玉よるの夜しろがねの白銀まじるらむ。

めぢの界さかひに物も無し、唯遠とほなが長なみきき並木路、
 路に沿ひたる檜きの樹は、巨人の列つらの佇たゞ立まひ、
 疎まばらに生おふる筭はゝ木きぎや、新墾にひばり小田をだの末かけて、
 鋤すき休やすめたる野のらまでも領りやうずる顔の姿かな。

木立こだちを見れば沙門しゃもん等が野邊のべの送おくの營いとなみに、
 夕暮ゆふぐがたの悲を心に痛み歩むごと、
 また古いにしへの六部等ろくぶらが後世ごせ安樂あんらくの願ぐわんかけて、

りやうちやうまうで
 靈場 詣、杖重く、番の御寺を訪ひしごと。

赤々として暮れかゝる入日の影は牡丹花の

眠れる如くうつろひて、河添馬道開けたり。

噫、冬枯や、法師めくかの行列を見てあれば、

たとしへもなく静かなる夕の空に一一列、

瑠璃の御空の金砂子、星輝ける神前に

進み近づく夕づとめ、ゆくてを照らす星辰は

壇に捧ぐる御明の大燭臺の心にして、

火こそみえけれ、其棹の閻浮提金ぞ隠れたる。

水かひば

ほらあなめきし落窪おちくぼの、
夢も曇るか、こもり沼ぬは、
腹しめすまで浸ひたりたる
まだら牡牛の水かひ場ば。

坂くだりゆく牧まきがむれ、
牛は練ねりあし、馬だくは、
時しもあれや、落日らくじつに

嘯うそぶき吼うゆる黄あめうし牛よ。

日のかぐろひの寂じやくまく寞まや、

色も、にほひも、日のかげも、

梢ゆふばえのしづく、夕ゆふ榮ばえも。

靄もやは刈かり穂ほのはふり衣ぎぬ、

夕ゆふ闇やみとざす路みち遠とほみ、

牛うしのうめきや、斷つ末すえ魔ま。

おそれ
畏怖

きたむか
北に面へるわが畏怖おそれの原の上に、

おきな
牧羊の翁、神樂月角を吹く。

ひつじごや
物憂き羊小舎のかどに、すぐだちて、

まがつび
災殃のごと、死の羊群を誘さそふ。

かたくい
きし方の悔をもて築きづきたる此小舎は

くくに
かぎりもなき、わが憂愁の邦くにに在りて、

めくさがまずみ
ゆく水のながれ薄荷莢めくさがまずみにおほはれ、

くもでよど
いぎよひの波も重きか、蜘蛛手くもでよどに澱む。

肩に赤十字ある墨染すみぞめの小羊よ、
色もの凄き羊群も長棹ながさをの鞭に
撻うたれて歸る、たづたづし、罪のねりあし。

疾風はやてに歌ふ牧羊の翁、神樂月よ、
今、わが頭掠かしわすめし稻妻の光に
この夕ゆふべおどろおどろしきわが命かな。

火宅

嗚呼、爛壞らんゑせる黄金わうこんの毒あたに中あたりし大都會、

石は叫けむりび烟舞けむりひのぼり、

驕慢まろやねの圓蓋まろやねよ、塔すぐだちよ、直立すぐだちの石せきちゆう柱ちゆうよ、

虚空は震なれひ、勞役なれのたぎち沸なれくを、

好なれむや、汝なれ、この大畏怖だいいふを、叫喚なれを、

あはれ旅たびうど人、

悲なれみて夢なれうつら離さかりて行くか、濁世だくせいを、

つゝむ火焰なれの帶なれの停車場ば。

中なかぞら空そらの山なれけたたまし跳をどり過をどぐる火輪くわりんの響なれ。

なが胸を焦すこが 早鐘はやがね、陰々と、とよもす音もおと、
 この夕ゆふべ、都會に打ちぬ。炎上の焰あかく、赤々、
 千萬せんまんの火粉ひのこの光、うちつけに面を照らしおもて、
 聲こわぐろ 黒きわめき、さけびは、妄執やごゑの心の矢聲。
 満身すべて流聖とくせいの言葉に振れねぢ、
 意志あへなくも狂瀾にのまれをはんぬ。
 實げに自らを誇りほこつゝ、將はた、詛のろひぬる、あはれ、
 人の世。

 時鐘とけい

やかた
館の闇の静かなる夜にもなれば訝しや、

廊下のあなた、かたことと、杖のおと、杖の音、

「時」の階のあがりおり、小股に刻む音なひは

これや時鐘の忍足。

硝子の蓋の後には、白鑑の面飾なく、

花形模様色褪めて、時の数字もさらばひぬ。

人の氣絶えし渡殿の影ほのぐらき朧月よ、

これや時鐘の眼の光。

うち沈みたるねび聲に機のおもり、音ひねて、
 槌つちに鑪やすりの音もかすれ、言葉悲しき木きの函はこよ、
 細身ほそみの秒の指のおと、片かた言ことまじりおぼつかない、

これや時鐘とけいの針の聲。

角かくなる函はこは櫛かしづくり、焦茶こげちやの色の框わくはめて、
 冷つめたき壁かべに封ふうじたる棺ひつぎのなかに隠れすむ
 「時とき」の老骨らうこつ、きしきしと、數囁かずかむ音おとの齒はぎしりや、

これぞ時鐘とけいの恐ろしさ。

げに時鐘とけいこそ不思議なれ。

あるは、木履きぐつを曳ひき悩み、あるは徒跣はだしに音ねを竊ぬすみ、
忠々まめくしくも、いそしみて、古ふるく仕ふるはした女めか。
柱はしら時鐘どけいを見詰みつむれば、針はりのコムパス、身みの搾しめぎ木。
柱はしら時鐘どけいを見詰みつむれば、針はりのコムパス、身みの搾しめぎ木。

ジオルジュ・ロオデンバッツハ

たそがれ
黄昏

夕暮がたの蕭しめやかさ、燈火あかり無き室まの蕭しめやかさ。

かはたれ刻どきは蕭しめやかに、物静かなる死の如く、

おぼろく、
朧々の物影のやをら浸み入り廣ひろがるに、

まづ天井の薄うす明あかり、光は消えて日も暮れぬ。

物靜かなる死の如く、微笑ほゝゑみ作つくるかはたれに、

曇曇れる鏡よく見れば、別わかれ手振てぶりうれたくも

わが倂おもかげしめは蕭すべやかに迂うり失うせなむ氣色けはひにて、

影薄いづゑをれゆき、色蒼いろあをみ、絶たえなむとして消けつべきか。

壁かに掲あぶらゑけたる油畫あぶらゑに、あるは朧おぼろに色褪おぼろめし、

框わくをはめたる追憶おもひでの、そこはかとなおもひでく留おもひでまれる

人の記憶おぼろの圖づの上に心うへの國さんすゐの山水さんすゐや、

筆えんぴつにゑがける風景ふうけいの黒くろき雪ゆきかと降ふり積たまるる。

夕暮ゆふぐがたの蕭しめやかさ。あまりに物もののねびたれば、

沈める音の絃の器に、棹をかけたる思にて、
 無言を辿る戀なかの深き二人の眼差も、
 花毛氈の唐草に絡みて縊るゝ夢心地。

いと徐ろに日の光隠ろひてゆく蕭やかさ。
 文目もおぼろ、蕭やかに、噫、蕭やかに、つくねんと、
 沈黙の郷の偶座は一つの香にふた色の
 匂交れる思にて、心は一つ、えこそ語らね。

アンリ・ドウ・レニエ

銘しるし文ぶみ

夕まぐれ、森こみちの小路よつつじの四辻よつつじに

夕まぐれ、風かまどのもなかの逍遙せうえうに、

寵かまどの灰ちやうごや、歳さいげつ月に倦つかみ勞つかれ來て、

定ぢやうご業ごふのわが行末ぎやうまつもしらま弓、

杖たづと佇たづむ。

路みちのゆくてに「日ひ」は多し、
今更ながら、行きてむか。

ゆふべゆふべの旅枕、

水こえ、山こえ、夢こえて、

つひのやどりはいづかたぞ。

そは玄妙げんめうの、静寧せいねいの「死し」の大神おほかみが、

わがまなこ、閉ぢ給ふ國、

黄金わうごんの、浦安うらやすの妙たへなる封ふうに。

高たか檜がしの寂寥せきれうの森の小路よ。

岩角に懈怠けたいよろぼひ、

きり石に足弱あしよわ悩み、

歩む毎ごと、

きしかたの血潮ちしほ流れて、

木枯こがらしの颯々さつさつたりや、高檜たかがしに。

噫、われ倦みぬ。

赤楊はんのきの落葉らくえふの森の小路よ。

道行く人は木葉このはなす、

蒼あをざめがほの耻のおも、

ぬかりみ迷ひ、群れゆけど、

かたみに避けて、よそみがち。

泥ぬかりみ 凜れんの、したゝりの森の小路よ、

憂いうしう 愁しうを風は葉並に囁きぬ。

しろがねの、月つきしろ代の霜さゆる隠こもりぬ沼ぬは

たそがれに、この道のはてに澱よどみて

げにこゝは「鬱うつ憂い」の

鬼おにが栖すむ國。

秦とねり皮この、眞まさ砂ご、いさごの、森の小路よ、

微そよ風かぜも足あし音おとたてず、

梢しやうより梢しやうにわたり、

やまみつ
山蜜の色よき花は

こんじき すなご
金色の砂子の光、

おのづから曲れる路は

人さらになぞへを知らず、

このさきの都のまちは

まれびとを迎ふときゝぬ。

いぎ足をそこに止めむか。

あなくやし、われはえゆかじ。

しやうみち
他の生の途のかたはら、

ものかげ なきがら
「物影」の亡骸守る

ぐわん つや
わが「願」の通夜を思へば。

高たかがし櫓の路われはゆかじな、

秦とねりこ皮や、赤はんのき楊みちの路、

日のかたや、都のかたや、水のかた、
なべてゆかじな。

噫、小路、

血やにじむわが足のおと、
死したりと思ひしそれも、

あはれなり、もどり來たるか、

地ぢひゞき響のわれにさきだつ。

噫、小路、

安逸あんいつの、醜辱しうじよくの、驕慢けうまんの森もりの小路よ、

あだなりしわが世よの友ともか、吹風ふくかぜは、

高櫳たかがしの木下蔭このしたかげに

聲こゑはさやさや、

涙なみださめざめ。

あな、あはれ、きのふゆゑ、夕暮悲し、

あな、あはれ、あすゆゑに、夕暮くる苦し、

あな、あはれ、身のゆゑに、夕暮重し。

愛の教

いづれは「夜」^{よる}に入る人の

をささな心も 青^{せいしゆん} 春も、

今はた過ぎしけふの日や、

従^{しよよう} 容として、ひとりきく、

「冬^{ふゆ}筆策」にさきだちて、

「秋」に響かふ「夏^{なつぶえ}笛」を。

(現世^{げんぜ}にしては、ひとつなり、

物のあはれも、さいはひも。)

あゝ、聞け、樂^{がく}のやむひまを

「長月姫ながつきひめ」と「葉月姫はづきひめ」、

なが「憂愁」と「歡樂」と

語らふ聲の蕭しめやかさ。

(熟じゆくしうみたるくだものゝ

つはりて枝や撓たわむらむ。)

あはれ、微風そよかぜ、さやさやと

伊吹いぶきのすゑは木枯こがらしを

誘さそふと知れば、憂かれども、

けふ木枯こがらしもそよ風も

口ふれあひて、熟睡うまいせり。

森蔭はまだ夏なつみどり緑、

夕まぐれ、空より落ちて、

笛の音は山鳩ねよばひ、

「夏」の歌「秋」を揺そりぬ。

曙の美しからば、

その晝は晴れわたるべく、

心だに優しくあらば、

身の夜も樂しかるらむ。

ほゝゑみは口のさうび花、

もつれ髪がみ、鬢わげにゆふべく、

眞清水ましみづやいつも澄みたる。

あゝ人よ、「愛」を命のりの法とせば、

星や照らさむ、なが足を、
いづれは「夜」^{よる}に入らむ時。

花冠

途のつかれに項^{うなだ}垂れて、
黙^{もくぜん}然たりや、おもかげの
あらはれ浮ぶわが「想」^{おもひ}。
命の朝のかしまだち、
世路^{せいろ}にほこるいきほひも、

今、たそがれのおとろへを
透しみすれば、わなゝきて、
顔背そむくるぞ、あはれなる。
思ひかねつゝ、またみるに、
避けて、よそみて、うなだるゝ、
あら、なつかしのわが「想」。

げにこそ思へ、「時」の山、
山越えいでゝ、さすかたや、
「命」の里に、もとほりし
なが足音もきのふかな。

さて、いかにせし、盃に

水やみちたる。としごろの

願ぐわんの泉はとめたるか。

あな空手むなでくちびがわ、唇乾き、

とこしへの渴かつに苦にがめる

いと冷ひやき笑ゑみを湛たへて、

ゆびさせる其足もとに、

玉たまの屑くづ、埴土はにのかたわれ。

つぎなる汝なれはいかにせし、

こはすさまじき姿かな。

そのかみの朧らふたき風情ふせい、

なよたけ

嫋竹なよたけの、あえかのなれも、

おぞ

鈍おぞなりや、宴うたげのくづれ、

みだれ髪がみ、肉ししおきたるみ、

酒さけの香かに、衣きぬもなよびて、

踏む足も酔ひさまだれぬ。

あな忌々ゆゝし、とく去いねよ、

さて、また次つぎのなれが面おも、

みれば麗れい容よううつろひて、

かなし^み 悲削ぎしやつれがほ、

指組^{ゆびく}み絞^{しぼ}り胸隠^{むねかく}くす

双^{さう}の手振^{てぶり}の怪^{あや}しきは、

饘^すえたる血^ちにぞ、怨^{えん}恨^{こん}の

毒^{どく}ながすなるくち蝮^{ばみ}を

掩^{おほ}はむためのすさびかな。

また「驕慢^{おと}」に音^{おと}づれし

なが獲物^{えもの}をと、うらどふに、

えび染^{ぞめ}のきぬは、やれさけ、

笏^{しやく}の牙^げも、ゆがみたわめり、

又、なにものぞ、ほてりたる

もろ手ひろげて「樂欲」に

らうがはしくも走りしは。

酔すゐきやう狂だきしめむごの抱擁むご酷こく

唇を噛み破られて、

満まんめん面つめに爪あとたちぬ。

興きようざめたりな、このくるひ、

われを棄すつるか、わが「想」、

あはれ、耻かし、このみざま、

なれみづからをいかにする。

おこなひ

しかはあれども、そがなかに、

行清きたゞひとり、

きぬもけがれと、はだか身に、

出でゆきしより、けふまでも、

あだし「想」の姉妹と

道異なるか、かへり來ぬ、

——あゝ行かばやな——汝がもとに。

法苑林の奥深く

素足の「愛」の玉容に

なれば、ゐよりて、睦みつゝ、

靈華の房を摘みあひて、

うけつ、あたへつ、とりかはし

双さうひたひの額ひたひをこもごもに、

飾いっるや、一いっの花くわんむりの冠むり

ホセ・マリヤ・デ・エレディアは金工の如くアンリ・ドウ
 ・レニエは織人の如し。また、譬喩を珠玉に求めむか、彼
 には青玉黄玉の光輝あり、此には乳光柔き蛋白石の影を浮
 べ、色に曇るを見る可し。

譯者

フランシス・キエレ・グリフィン

延びあくびせよ

延のびあくびせよ、かたはら傍に「命」は倦みぬ、

——あさけ朝明より夕をかけてうまい熟睡する

そのらふ臍たげさつか勞らしさ、

ねむり眼のうまし「命」や。

起きいでよ、呼ばゝりて、過ぎ行く夢は

おほかけ
大影の奥にかくれつ。

今にして躊躇ためらひなさば、

ゆく末なんしるべに何の導ぞ。

呼ばゝりて過ぎ行く夢は

去りぬ神祕くしびに。

いでたちの旅路の糧かてを手握たにぎりて、

歩あゆみもいとゞ速はやまさる

愛の一念ましぐらに、

急げ、とく行け、

呼ばゝりて、過ぎ行く夢は、

夢は、また歸り來なくに。

進めよ、走はせよ、物陰に、

畏をなすか、深淵しんゑんに、

あな、急げ……あゝ遅れたり。

はしけやし「命」は愛うまいに熟睡して、

拷たくづぬ綱しろたの白腕たむきになれを巻く。

——噫あゝお遅れたり、呼ばゝりて過ぎ行く夢の

いましめもあだなりけりな。

ゆきずりに、夢は嘲る……

さるからに、

むしろ「命」に口觸れて

これに生ませよ、藝術を。

無言を禱るかの夢の

教をきかで、無邊なる神に憧るる事なくば、

たちかへり、色よき「命」かき抱き、

なれが刹那を長久にせよ。

死の憂愁に歡樂に

靈妙音を生ませなば、

なが亡き後に残りゐて、

はた、さゞめかむ、はた、なかむ、

うれしの森に、春風や

若緑、

去年をこぞ繰返あこぎの愛のまねぎに。

さればぞ歌へ微笑ほほゑみの榮はえの光に。

アルベエル・サマン

伴奏

しろがねしろがねのはこやなぎ筐柳、ぼだいず菩提樹や、はん榛のき樹や……
みづみづおもおもつきつきおちばおちば
水の面に月の落葉よ……

ゆふべゆふべのくし風にたけなが櫛がみけがみづるの丈長み髪の匂ふふごとと、
よよかかををりり
夏の夜の薰なつかし、
かげみづう黒みうきう湖への上、

水かを薫る淡あはうみ海ひらけ鏡なす波のかゞやき。

楫との音もうつらうつらに

夢をゆくわが船のあし。

船のあし、空をもゆくか、

かたちなき水にうかびて。

ならべたるふたつのかい櫂は

「徒つれづれ然」のかい櫂「無しじま言」がい。

水の面おもの月影なして
波の上うへの楫この音となして
わが胸むねに吐息といきちらばふ。

ジアン・モレアス

かぞへうた
賦

色に賞めでにし紅薔薇こうさうび、日にけに花は散りはて、
唐棣花はねずいろ色よき若立わかだちも、季ときことごとくしめあへず、
そよそよ風の手枕たまくらに、はや日數ひかずへ経しけふの日や、
つれなき北の木枯に、河氷るべきながめかな。

噫、歡樂よ、今さらに、なじかは、せめて争はむ。
 知らずや、かゝる雄誥をとけびの、世に類たぐひ無く烏滯をこなるを、
 ゆゑだもなくて、徒に痴しれたる思、去りもあへず、
 「悲哀」の琴きんの絲の緒をを、ゆし按あんずるぞ無益むやくなる。

*

ゆめ、な語りそ、人の世は悦よろこびおほき宴うたげぞと。
 そは愚かしきあだ心、はたや卑ししき痴しれごゝち。
 ことに歎なげくな、現うつしよ世かぎりを涯も知らぬ苦界くがいよと。
 益やうな無ゆうき勇ゆうの逸はやりぎ氣は、たゞいち早く悔いぬらむ。

春日霞みて、葦蘆のさゞめくが如、笑みわたれ。
はるひ いそはま よしめし
 磯濱かけて風騒ぎ波おとなふがごと、泣けよ。
いっさい
 一切の快樂を盡し、一切の苦患に堪へて、
いっさい
 豊の世と稱ふるもよし、夢の世と觀ずるもよし。
とよ た

*

死者のみ、ひとり吾に聽く、奥津城處、わが栖家。
をふ おくつきどころ すみか
 世の終るまで、吾はしも己が心のあだがたき。
えいぐわ
 亡恩に榮華は盡きむ、里鴉畠をあらさむ、
さとがらすはた

とりいれどきたのめの頼なきも、吾はいそしみて種を播かむ。

ゆめ、自らは悲まじ。世の木枯もなにかあらむ、
 あはれ侮蔑ぶべつや、誹謗ひぼうをや、大凶事おほまがごとの迫害せまりをや。
 たゞ、詩の神の筥くじの上、指をふるれば、わが樂がくの
 日毎ひごとに清く澄みわたり、靈妙れいめうおん音の鳴るが樂しさ。

*

長雨空はてすの喪過はてすぎて、さすや忽ち薄日影、
 冠かむりの花葉はなばふりおとす栗の林の枝うへの上に、

水のおもてに、遅おそ花ばなの花壇の上に、わが眼にも、
照り添ふ匂なつかしき秋の日脚ひあしの白みたる。

日よ何の意ぞ、夏なつ花はなのこぼれて散るも惜からじ、
はた禁とぎめえじ、落らく葉えふの風のまにまに吹き交ふも。
水や曇れ、空も鈍にびよ、たゞ悲のわれに在らば、
想おもひはこれに養はれ、心はために勇ゆうをえむ。

*

われは夢む、滄さう海かいの天そらの色、哀あは深れき入日の影を、

わだつみの灘なだは荒れて、風を痛み、甚いたぶ振る波を、
 また思おもふ釣つり船ふねの海人あまの子を、巖いは穴あなに隠かくるふ蟹かにを、
 青せい眼がんのネアイラを、グラウコス、プロオテイウスを。

又思ふ、路の邊べをあさりゆく物乞ものごひの漂浪人さすらひびとを、
 栖すみ慣れし軒端のきがもとに、休いこひるる賤しづが翁おきなを、
 斧えの柄たにぎを手握りもちて、肩かゞむ柚そまの工たくみを、
 げに思ひいづ、鳴神なるかみの都みやこの騷擾さやぎ、村肝むらぎもの心こころの痕きずを。

*

この一切の無益むやくなる世の煩わづらひ累を振りすて、
 もの恐ろしく汚れたる都の憂あとにして、
 終に分け入る森陰すゞの清やどりしき宿求めえなば、
 光も澄める湖みづうみの静けき岸にわれは悟らむ。

あらずむしろ
 否、寧われはおほわだの波うちぎはに夢みむ。

幼年の日を養ひし大搖籃だいえうらんのわだつみよ、

ほだしも波の鷗かもめどり鳥、呼びかふ聲を耳にして、

磯根に近き岩いはまくら枕汚れし眼まなこ、洗はゞや。

*

噫いち早く襲ひ来る冬の日、なにか恐るべき。

春の卯月の贈物、われはや、既に盡し果て、

秋のみのりのえびかづら葡萄も摘まず、新麥の

豊の足穂も、他し人、刈り干しにけむ、いつの間に。

*

けふは照日の映々と青葉高麥生ひ茂る

大野が上に空高く靡びかひ浮ぶ旗雲よ。

和ぎたる海を白帆あげて、朱の曾保船走ること、

變化^{へんげ}乏^{あをぞら}しき青天をすべりゆくなる白雲よ。

時ならずして、汝^{なれ}も亦近づく暴風^{あれ}の先驅^{さきがけ}と、

みだれ姿の影黒み蹙^{しが}める空を翔^{かけ}りゆかむ、

嗚呼、大空の馳^{はせづ}使^{かひ}、添はばや、なれにわが心、

心は汝^{なれ}に通へども、世の人たえて汲む者もなし。

嗟嘆といき

ステファンヌ・マラルメ

静かなるわが妹いもと、君見れば、想おもひすゞろぐ。

朽葉色くちばいろに晩秋おそあきの夢深き君が額ひたひに、

天人てんにんの瞳ひとみなす空色の君がまなこに、

憧あこがるゝわが胸は、苔古りし花苑はなぞのの奥、

淡白あはじろき吹上ふきあげの水のごと、空へ走りぬ。

その空は時雨月、清らなる色に曇りて、

時節をりふしのきはみなき鬱憂は池に映ろひ

落葉らくえふの薄黄うすぎなる憂悶わづらひを風の散らせば、

いざよひの池水いけみづに、いと冷ひやき綾あやは亂れて、

ながながし梶子くちなしの光さす入日たゆたふ。

物象を静観して、これが喚起したる幻想の裡、自から心象の飛揚する時は「歌」成る。さきの「高踏派」の詩人は、物の全般を採りて之を示したり。かるが故に、其詩、幽妙

を虧き、人をして宛然自から創作する如き享樂無からしむ。それ物象を明示するは詩興四分の三を没却するものなり。讀詩の妙は漸々遅々たる推度の裡に存す。暗示は即ちこれ幻想に非らずや。這般幽玄の運用を象徴と名づく。一の心状を示さむが爲、徐に物象を喚起し、或は之と逆まに、一の物象を採りて、闡明數番の後、これより一の心状を脱離せしむる事これなり。

ステファンヌ・マラルメ

テオドル・オオバネル

はくやう
白楊

落日の光にもゆる

はくやう

そび
白楊の聳やく並木、

谷隈になにか見る、

風そよぐ梢より。

故國

小鳥でさへも巢は戀し、
まして青空、わが國よ、
うまれの里の波羅葦パライソウ増雲。

海のあなたの

海のあなたの遙けき國へ

いつも夢路の波枕、

波の枕のなくななくぞ、

こがれあこが憧れわたるかな、

海のあなたの遙けき國へ。

オオバネルは、ミストラル、ルウマニユ等と相結で、十九世紀の前半に近代プロワンス語を文藝に用ゐ、南歐の地を風靡したるフェリイブル詩社の翹楚なり。

「故國」の譯に波羅葦パライソウ増雲とあるは、文祿慶長年間葡萄牙語より轉じて一時、わが日本語化したる基督教法に所謂天

國の意なり。

譯者

アルトウロ・グラアフ

解悟かいご

頼み入りし空あだなる幸さちのひと一つだにも、忠まごころ心ありて、

とまれるはなし。

そをもふと、胸はふたぎぬ、悲にならぬ胸も

にうれひがき憂うれひに。

きしかたの犯をかの罪ひとの一つだにも、懲こらしの責せめを

のがれしはなし。

そをもふと胸はひらけぬ、あば荒屋らやのあはれの胸も

高かき望に。

ガブリエレ・ダンヌンチオ

篠懸すげかけ

白波しらなみの、潮騒しほざめのおきつ貝なす

青緑あをみどりしげれる谿たにを

まさかりの眞晝しるぞ知す。

われは昔の野山の精せいを

まなびて、こゝに宿からむ、

あゝ、神寂びし篠懸よ、
なれがにほひの濡髪に。

海光

こら
兒等よ、今晝は眞盛、日こゝもとに照らしぬ。
じやくまくだいかい
寂 寞 大海の禮拜して、
あまつひ
天津日に捧ぐる香は、
うしほ
淨まはる潮のほひ、
なごり
轟く波凝、動がぬ岩根、
いはね
靡く藻よ、

黒^{くろ}金^{がね}の船の舳^へ先^{さき}よ、

みさきいしやいろ

岬代^{みさ}赭^い色^{しやいろ}に、獅子^{しし}の踏^ふ留^{とど}める如^{ごと}く、

足を延^のべたるこゝ、入^い海^{りう}のひたおもて、

うちひさす都^{みやこ}のまちは、

わづらひ

煩^{わづらひ}悶^{ぼん}の壁^{かべ}に惱^{なや}めど、

鏡^{かがみ}なす白^{しろ}川^{かは}は蜘蛛^{くも}手に流^{なが}れ、

風^{かぜ}のみひとり、たまさぐる、

ほらあなぐち

洞穴^{ほら}口^{あなぐち}の花^{はな}の錦^{にしん}や。

青空文庫情報

底本：「上田敏全訳詩集」岩波文庫、岩波書店

1962（昭和37）年12月16日第1刷発行

1979（昭和54）年10月10日第19刷発行

※底本の本文は、序の組みに対して2字下げになっていますが、注記は省きました。

入力：阿部哲也

校正：川山隆

2011年2月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海潮音

上田敏

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 上田敏訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>